

ヘーゲルの世界史観における民族精神

久保田 勉

序

ヘーゲルの哲学体系の中に一定の場を占める歴史哲学として、彼の「世界史観」は完結した容姿をあらわしている。彼が言うところの「哲学的世界史」は「ある民族の原理を、その諸制度や諸運命から把握して諸々の出来事をその原理から展開する」¹⁾と共に、「普遍的な世界精神が……自己形成の様々な段階を経過してきた事」¹⁾を考察せんとするものである。したがって、諸民族精神の把握と共に、「特殊な諸民族精神の弁証法」¹⁾として、世界精神という実体の展開あるいは実現を、つまり諸民族精神相互の関係、運命を把握せんとするものである。ヘーゲルが言う世界史とは、世界精神の「自己意識」と「自由の概念」の発展にはかならない。世界精神は「精神がそれ自身の真の概念を対自的に産み出す経過の体系」²⁾であり、そして民族精神は「同時に本質的に特殊な精神であり、同時に絶対的な普遍的精神に他ならない……かくして、民族精神は特殊な形態における普遍的精神である。普遍的精神はこの特殊な形態を自己においては超えている……民族精神の特殊性は、民族精神が精神について持つその意識の在り方に存する」²⁾。「精神はもともと個体である。しかし世界史の境位においては、われわれは個人または特殊な個人性に制限したり還帰したりすることにはかかわらない。歴史における精神は個体であるが普遍的な本性であり、同時にしかし特定のもの、すなわち民族一般である」³⁾と言う。したがって、歴史の哲学が取り扱うべき精神は「民族精神」である。

われわれが、本稿で取り扱おうとしているのは、かれの歴史哲学におけるこの「民族精神」である。(この後、引き続いて民族精神を形成する基幹として、Genius と Milieus とを論じていくつもりでいる)。

注

1) Enz. III. S. 457

2) V-G. S. 60

3) ibid., S. 59

1. ヘーゲルの世界史観の根底にあるもの

ヘーゲルが念頭におく哲学の任務は、理性的なものの徹底的な究明であるから、正にその故に現存するものならびに現実的なものの把握であり、神のみがその存在を知ると言われる彼岸的なものの主張ではない。哲学の課題は「存在するものを概念的に把握する事である。けだし、存在するものは理性だからである」¹⁾と言う。ここに言われている理性は、もちろん個人の主観的な理性ではなく、万有を貫く存在の理法、合法則性、必然性として現実の中に内在し、現実の中に顕現するものである。

「哲学の最終目的と関心は、思想、概念を現実性と宥和するところにある」²⁾というこの姿勢は、ヘーゲルの壮大な哲学体系を一貫するものである。こうした意図をもって、現実性に向かっていくことで、それが理性的なものだ事が解明されていく。すなわち、現実性は理性を通して真の実在性を手にいれるのである。現実性とは、常に普遍性と特殊性との統一性、言い換えれば、その一体性は、普遍性が特殊性へと分解されており、これが全体において支持され保有されているとしても、一個の独立的なものとして現れるような特殊性である。

この統一性を欠く限り、在るものはたとえ現実顕現しているように見えても、それは現実的なものではない。「切り落とされた手は、それでも手のように見えるし、現実顕現しているように見えても、現実的であるとは言えない。真実の現実性は必然性である。すなわち、現実的なものはそれ自身

の内において必然的なものである。』³⁾ ヘーゲルの言うこの必然性とは、全体が概念の区別項に分解されていること、この分解されたものが固定的・持続的な規定性となり、しかもこの規定性が生命の通わぬものではなく、かえって解体しながらも不断に自己を産み出して行くことを本性とするものである。

こうして、ヘーゲルの論考に従えば、理性あるいは理性的精神は、世界の基根であり、あらゆる現実性は、その理性の発展・具現せるものに他ならないのである。すべての現実性が理性の具現であるとするとき、世界史もまた理性の具現せるものであり、しかもそれは自覚的理性、つまり世界精神の具現に他ならない。世界史において、民族や世界を嚮導するものは理念、すなはち理性的精神であり、それは自然態 *Natur* においては「即自的」に存在するものである。それにも拘らず、それは精神的現実性において意識、自己意識をもたらして来る。「この運動は、精神的実体の開放の道行であり、世界の絶対的究極目的を世界の中で実現していく働きである。この働きによって、最初はまだ即自的に存在しているにすぎなかった精神は、意識と自己意識とを獲得するのである。このことによって精神は自らの生のままの本質 *an und für sich* を啓示と現実態へともたらす。かくして精神自身は、また外面的に普遍的なる精神、すなはち世界精神となるのである。この発展は時と現実存在との中にあり、したがって歴史として存在する。それで世界精神の発展における個々の諸契機・諸段階であるものは諸々の民族精神である。』⁴⁾ 各々の民族精神は、質的规定性における個性・自然的精神として、行全体の中で単に一つの段階だけを充満し、唯一つの業務だけを果たすように規定されているのである。「世界史が理性的に行われてきたということ、世界史は世界精神の理性的で、必然的な行程であったということ、そしてこの精神の本性は同一不変のものであるが、この“唯一の本性” *eine Natur* は世界の存在の中で実現するものだということは、世界史そのものの考察によって始めて明らかになる事である。』⁵⁾ このように、世界史の全体は、そこに「唯一の本性」を明示する世界精神の本質開示・具現に他ならない。「唯一の

本性」は、歴史の端緒からそこに存在しているものであって、即自的に存在はしているものの、いまだその内部から実存 Existenz にまで達していないだけのものである。それは、あたかも「植物の萌芽が、その中に樹の全性質、果実の味や形を含んでいるように、精神の最初の足跡もまたすでに全歴史を潜在的に含んでいるのである。」⁶⁾ 歴史の最終目的は、この萌芽が展開して行くように、「唯一の本性」「原理」を長い年月をかけて現実世界の中で完成することである。

世界精神の、この「原理」「唯一の本性」とは何であろうか。また、世界史の「理念」と言っているものは何であろうか。「原理」や「唯一の本性」について、これらをヘーゲルは「内的な、最も内奥からの無意識的な衝動」⁷⁾と言っているが、それは「自由」に他ならず、世界史の全過程を営むものである。世界史の全事業は、この衝動を意識にまで高めて行く努力に他ならない。世界史は「自由の意識の進歩」⁸⁾を意味している。かくて、精神は世界史において常に意識となって自己を表現し、しかもこの意識は「自由」を本来的に本性とするものであり、「自由」は意識と不可分離的にその概念に属するものである。オリエントにあっては、わずかに一人の者が自由であり、ギリシア・ローマの世界ではごく少数の者が自由であることを知っていたに留まり、ゲルマンの世界において、すべての人間が人間として自由であるという意識に達している、と言う⁹⁾。自由が現実的となると、自由は意識となって現れてくる。だから自由が現実的になることは理性の絶対的な目標なのである。主観的意志と実体的意志との統一性として国家は自由の現実態であるから、世界史において問題となり得るのは、「諸民族について、それが国家を形成した民族だけ」¹⁰⁾である。このようにして、ヘーゲルによれば、歴史は理性的な国家の生成過程にはかならない。いかなる国家も、一定の民族によって組織化されたものであり、一定の民族精神の表現である。ここで、われわれはある民族の、この「民族精神」が何に由来するものであるかを尋ねてみたいと思う。

注

- 1) R-Ph. S. 15
- 2) G-d-Ph. S. 617
- 3) R-Ph. §. 270. S. 420
- 4) Enz. III. §. 549
- 5) G. Ph. S. 14
- 6) ibid., S. 23
- 7) ibid., S. 32
- 8) ibid., S. 24
- 9) ibid., S. 128
- 10) ibid., S. 49

2. 民族精神と世界精神

さて、世界精神の展開は、それが連続した諸段階の系列を産み出して行く必然性を持っている。それぞれの段階は事象の概念を通して生じてくるものであるし、「概念の展開の系列は实在形式の系列」¹⁾であるから、きわめて論理的な必然性にしがって継起するものである。したがって、継起してくる諸段階は先行する諸段階から論理的に生起すべきものであって、他の段階の上に立って恣意的に生起するはずのものではない。このように考えるとき、世界史の発展形式は当初からすでに固定したものと見られており、歴史家の任務はこの発展形式の外に置かれている。発展の形式がもはや変更できないものとすれば、歴史家に残されているのは、ただこの形式のうちに歴史的事実の内容を注ぎ込むだけのことである。

世界精神の、この発展はすでに見たように、歴史としてその足跡を残し、発展の諸契機・段階は諸々の民族精神であった。この民族精神は、世界史を通して進行している 普遍的精神の一契機にすぎず、「民族の自己意識は 普遍的精神がその現実存在において持っているその時々的发展段階の担い手であり、普遍的精神が自己の意志を織り込む客観的現実態である」²⁾し、一定の民族精神そのものは「世界史の行程にあっては、ただの個別態にすぎない」³⁾。また、すべての民族精神は単にその独自の精神を自覚しているにすぎず、その独自の関心と目的を追求するものであるから、民族精神は単独では権利

Berechtigung を対自的には持っていない。「民族精神の原理は、民族精神が実存の個人として、その客観的現実性、および自己意識を有するところの特殊性のために一般に制限され、そして相互関係におけるその運命および行動は、この精神の有限界に反映せる弁証法である。この弁証法からして、普遍的精神すなはち世界精神が無制約的なものとしてそれがあまに出現する。すなはち世界精神は自己の権利を——そして、この権利は最高のものであるのだが——世界法廷としての世界史において行使する。」⁴⁾かくて、民族精神は世界精神の単なる手段でしかない。理念は「その諸契機を総体として——しかもそれはただ諸契機のみなのだが——自己から遊離している」⁵⁾のである。

一つの民族精神は世界精神が示した段階を決して再び形成することは出来ない。一つの民族が完全にこの段階を成就し終えた時、すなはち、民族の精神があらゆる方面に向かって完全に実現し終えたとき、この民族は歴史の舞台から退場して行かねばならない。このとき、世界史は他の民族へと移動して行き、世界精神はその独自の概念の現実化のための民族に委ねるのである。しかし、ある民族の自己意識が、世界精神が自己の意識を織り込んでいる客観的な現実態である限り、従ってまた世界精神の発展的自己意識の進む中でその執行が委任されている限り、世界史的に現存しているが、実は世界精神の全権威がその背後に存在しており、それが絶対的権威を持っており、世界精神の采配にしたがって世界史の檣舞台に顕現しているのが、ある歴史的時点で世界に君臨している民族であり、この民族に比して他の民族はその権威をなくすのである。世界精神の現在その段階であるところの、この理念の必然的契機が絶対的権利を保持し、そしてこの段階において生存する民族および彼らの業がその完成と幸福と名誉を獲得する。世界精神がこの民族に松明を引き渡し、かの民族はその絶対的な資格を喪失するのである。⁶⁾しかしまた、没落の後になお高次の原則を自己の上に掲げることは出来はするが、それはもちろん彼独自のものではない。そのために「内在的な生命や新鮮さを伴ってはいない。それでも、なお存続し続けることがある

し、そのうえ自主性をも保持出来るし、戦争さえも導くことがあり得る。』⁶⁾しかし、活力はなく「偶然のまま様々な内事外争のうちにさまよう」⁶⁾のである。もはや目指すところも、内的な不変性もなく、それゆえに絶対的な権力は、次の若々しい民族精神に譲渡され、他民族へと移行して行くのである。

注

1) R-Ph. S. §. 32

2) Enz. III. §. 550

3) G-Ph. S. 66

4) R-Ph. §. 340

5) Enz. III. §. 550

8) R-Ph. §. 347 G-Ph. S. 120

3. 国家と民族精神

「民族の具体的な精神もそれが精神である点では精神的にのみ、すなはち理想によってのみ把握するものに他ならない。というのは、自分自身を産出すると言うところに民族精神の使命があるからである。』¹⁾ 歴史の中で民族精神は具体的なものとして「民族の意識と意欲、その現実性のあらゆる側面」²⁾に自らの表現形態を与えている。ある民族における理念の一段階が意識へと現れてきた場合には、精神はその自己意識のこの段階を民族精神の豊富な全域の中へと現していく。まさに民族のあらゆる活動領域はその一つの表現であり、かつまたその規定性にすぎない。民族の「宗教、政体、人倫、法律組織、習慣および学問、芸術、技術的伎倆など」²⁾は民族精神の共通の原理を、その印として各々に刻みこんだものである。民族精神はこのように「自分を現実存在する客観的世界として建設するところの特殊的精神である。そのために、この客観的世界はその民族特有の宗教を持ち、特有の礼拝を持ち、特有の習慣、特有の憲法、特有の法律を持ち、また、その民族特有の諸制度の全範囲を包容し、その諸々の事件と行為とから成るものである。それらは民族精神の作品であるが、また民族そのものである。』³⁾ 立法その他、民族の

全容はその根拠を概念の内にのみ持ち、この概念は精神が自ら作り出すものである。このように「いずれの世界史的民族の間にも特有の詩、造形美術、科学および哲学が存在している事は言うまでもないが、一般にその様式と傾向が異なっているばかりでなく、それ以上に中身が違っている。そしてその中身は最高の区別、すなはち理性的知性の区別に関するものである。」⁴⁾ このように民族精神は、ある民族のあらゆる法規、制度、精神的活動などにその姿を現し、自由の理念のいかなる段階、理性的知性のいかなる段階でも、そこに存在しているものを作りあげている原理であり、手配者である。それらは、みな民族精神の発露したものであり、世界精神の展開の中で、それらが占めている位置に従って、民族精神を介して固く規定されているのである。ヘーゲルは特にこの所を——国家、憲法を論考するにあたって——「歴史哲学」において強調している。国家は他のあらゆる歴史的領域と同じように、民族精神に依存しているのであるから、国家はそれとパラレルに発展せざるを得ないのである。民族精神ないし国家は理性的知性における一つの段階であるから、他領域の段階を出し抜いて世界史の舞台に登場することは出来ない。だからして、「良心の開放を待たずに、権利と自由との束縛を取り払おうとすること、宗教改革がなくても革命があり得る」⁵⁾ という事は考えられないのである。したがって、民族精神は「宗教と国家における自由の唯一の概念である。この概念は、人間の所有する最高の者であり、人間にとって実現されるものである。神についての悪しき観念を持つ民族は、悪しき国家、悪しき統治、悪しき法律を持つものである。」⁶⁾

従って、つぎのようなことが強調されねばならない。「一民族の憲法は、その民族の宗教、その民族の芸術や哲学、またはすくなくともその民族の観念や思想、すなはちその民族の文化あるいは教養一般（さらにはその気候、その隣邦、その世界における位置などのもっと立ち入った外的要素は問わないにしても）と共に、一個の実体、一個の精神を形成するものである。」⁷⁾ だからして、憲法を既に作成されたものとして観たり、憲法がひとつの民族に——よしんばそれがいかに理性的であっても——押し付けたりするのは正当

とは言えない。それは非合理的であり、また不可能なことである。押し付けられた民族はそのままでいることはなく、民族精神が提出したものに躊躇なく随伴したり、また民族精神に似合いの政体を醸し出すまでには、長い年月かけての営みの内に育ってくるものである。というのも、ある民族の精神が何かを要求しているとして、それを気短かに無法な強引さをもって阻止することは出来ないからである。「ギリシアでは民主的政治の形態が世界史的な規定であったのに対して、ローマでは貴族政治、それも民衆に背を向けた、傲然と構えた貴族的政治であった。」⁸⁾ このように「一民族に、たとい内容上多少の差はあっても理性的な憲法を先天的に与えようとする事、——この思い付きは、まさに憲法をして思想の制作物以上のものたらしめる契機を看過することになろう。——たとえば、ナポレオンはスペイン人に憲法を先天的に与えようとしたが、それは全く不成功に終わった」⁹⁾ のであった。憲法は単なる制作物ではない。かのソクラテスの道徳あるいは内面性の原理は、あの時代に必然的な産物であったが、それがギリシアの人々に自覚されるまでには相当に長い時間を要している。憲法は長い年月をかけた労作であり、理性的なものの理念であり、またその意識である。いかなる憲法も個人的主観の創造になるものであってはならない。

注

- 1) G-Ph. S. 89
- 2) *ibid.*, S. 79
- 3) *ibid.*, S. 92
- 4) *ibid.*, S. 86
- 5) *ibid.*, S. 542
- 6) Rel-Ph. S. 241
- 7) G-Ph. S. 57
- 8) *ibid.*, S. 380
- 9) R-Ph. §. 274

4. 民族精神の一般的展開

すでに、われわれが観てきたように、ある民族の性格、つまり民族精神は、第一に、ただ即自的に、つまり萌芽として存在しているに過ぎないものであった。民族精神の発展はつねにこの原則から出発して民族の意識へと進み、実現されていくのであった。しかし、精神の変化は単に若返ったり同一の形態に立ち返ったりして行くことではなくて、精神自身の加工錬成であり、精神の様々な営みのために材料を豊富に整えていくという観点からすれば、精神は多方面、多側面にむかって努力していることが見出される。ヘーゲルは言う、ある民族が努力没頭する「その方面と方向とは無尽蔵である。というのは、精神の創造物はいずれも、精神が創造を終えてそこに満足を見出すや否や、また新しい材料として精神に向かって来、再びまた精神の加工錬成を要求するものだからである。こうして単なる変化という抽象的な思想は、自分の力を自分の豊かな内容のあらゆる方面に向かって発揮するところの精神の思想に変わる」¹⁾ と。あらゆる領域に活動している民族精神は、民族の芸術、宗教、政治的状况、あらゆる法制の中に、常に自らを客観化しているのである。

ヘーゲルにあっては、哲学は民族精神の精華であるが、ある民族が思索しつつ自己を認識したとき、その精神は没落のままに委ねられる事になる。このとき哲学は「精神の内的な誕生の場所を準備し、後には現実的な形態へと歩み出すのである。」²⁾ ある民族精神が完全にその活動を実現した場合、もはやこの精神の活動はそれ以上には不必要となり、よしんば自足の状態で、なお持続することは出来るとしても——自分が手に入れようとしたものすべてを入手して、老境にさしかかった者のように——新しいことを創造する意欲はもう何もないのである。民族にしても、このような段階に達した場合、この民族は世界史の晴舞台から姿を隠し、没落の道を歩くのである。なお存続を欲するとしても、すでに観たように、新しい何かを意欲することなく引退していかざるを得ない。このように「民族の生命は熟れて実を結ぶ。というのは、民族の活動はその原理を実現するからである。しかし、この果実は民

族にとっては毒酒となる。だが、民族はこれに限りない渴望を覚えるために、この酒を諦める訳にはいかない。ところが、この酒を飲んだ報いはその民族の滅亡である。もっとも、それはまた新しい原理の出現である。』³⁾

不死鳥は自分自身のために薪を積み重ねておいて、その身を焼き殺すというが、再びその死灰の中から新しい若々しい生命として復活してくると聞く。しかし、「精神は単に自分の死屍を焼き滅ぼして、その屍を再生するものではなく、その灰の中から若返るものでもない。むしろ精神はだんだんと高められ、浄化されていって、以前よりも一層純粋な精神として以前の形態から生まれ出て来るものなのである。」⁴⁾

ヘーゲルは、いわばこうした民族精神の力学を総括して言う、すなはち、「それゆえに、この世界史の行程の結果、明らかにされたことは、精神が自分を客観化すると共に、この自分の存在を思惟することによって、一面では自分の存在の規定性を破壊すると共に、他面ではその存在の普遍的本質を把握し、そうすることによって自分の原理に新しい規定を与えるものなことである。こうしてここに、この民族精神の実体的な規定性が変化させられたのである。すなはち、民族精神の原理は他の、しかも一層高い原理に高まったのである」⁵⁾と。

注

1) G-Ph. S. 91

2) G-d-Ph. S. 70

3) G-Ph. S. 97

4) *ibid.*, S. 91

5) *ibid.*, S. 96

5. ヘーゲルの世界史観における民族精神の意義

われわれは、ヘーゲルの思想体系において民族精神は世界精神のひとつの段階として、自由の理念の契機として登場してくる形態として観てきた。このように、ヘーゲルにあっては民族精神は原初から自立した存在と観ることはせず、常にそれを世界精神と結びつけ、それなしには考えられるべきもの

ではない。世界精神はすべての継起する段階に先立つ萌芽として、先行段階の内に発芽力（衝動）として含まれているものであり、「論理的必然性」をもって自らの内部から発展するものであった。まさしく世界精神「展開の衝動は、だからして主観的な意志の自由ではなくて、理性に内在している論理的必然性である。」¹⁾

かくて、経験的・史實的に存在している民族は何もすることなしに存続するものではある。世界精神は民族とは全く無関係に自己を発展させ、その段階が存在するに値する有為の民族を捜し出すのである。経験的な民族は、民族精神を自分自身の中から発展出来るものではない。なぜなら、その民族の活動は世界精神の先行段階の中にすでに前もって規定されていたものである。自らそれ以上に活動することが出来ず、世界精神が構想としてそれを育成し、世界精神が指図すること以上には進み得ないのである。「世界精神の王座をめぐるそれらの民族精神は世界精神実現の遂行者として、また偉大なる世界精神の証しおよび装飾として存在する。」²⁾ 世界精神の構想を超えて出て行くことが出来ないとすれば、このことは新しい民族精神の課題なのである。ヘーゲルによれば、民族精神と、われわれが文化的段階と言っているものとは、共に崩壊していくものであり、それらを何時までも維持、発展、遂行できるものではなく、世界精神が示すひとつの文化的段階を形成しているだけのものである。

さらに言えば、世界精神の発展は、経験的な諸民族とは全く無関係に、自主独立して進行するものであり、ただそれに内在している論理的必然性という基盤の上に展開して行くものであるから、民族精神はア・プリオリに、経験の内容を原初から文字通り全然持ってはならず、ただ超感覚的・精神的なものである。民族精神は世界精神の一断片を内容として持っているにすぎないのである。ヘーゲルは端的にこう主張する、「概念発展の諸契機は、同時に具体的な発展でもある」³⁾ と。超感覚的なものには感覚的なものが対応しているし、世界精神の契機は同時に現実的・事實的に存在している民族の原理であり魂である。

かくして「民族精神」は、世界精神の代役としてのみ世界史の中に確実に織り込まれたのである。民族精神が、世界精神の展開のために経験的現実態と関連するためには、その手順を必然的に必要とするのである。世界精神の展開と経験的諸民族の発展との間の、こうした中間物としては、両者に何か即自的に存在する概念だけが相応しいものである。というのは、このためには経験的現実態においてのみ存在する国家を必要とするからである。あたかも数学者が方程式を用いるように、世界史の哲学的な意味を見出さんがために、問題解決のために、ヘーゲルは「民族精神」という名称のもとに、相対するものの関連を付与させたものと考えられる。〈未完〉

注

1) W-E. S. 462

2) R-Ph. §. 352

3) ibid. §. 32

本文中に引用した文献は、すべて略符号をもって記したが、それらの文献は次のとおりである。

R-Ph. Grundlinien der Philosophie des Rechts. hrsg. v. Lasson. 3 Aufl. Leibzig 1930

G-Ph. Vorlesungen über die philosophie der Geschichte. III (Werke Bd. X V. 2. Aufl. Berlin 1844)

Enz. III. Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften. (Werke Bd. VII. Berlin 1845)

W-E W. Wundt; Ethik. Bd .2 .Stuttgart 1924

G. d. Ph. Geschichte der Philosophie III. (Werke XI .Berlin 1840)

Re 1-Ph. Vorlesungen über die Philosophie der Religion (Werke XI. Berlin 1840)

V-G. Hoffmeister; Vernunft in der Geschichte 1930.